

TAMABI NEWS

Tama Art University News Magazine

vol.103

生活を潤す 道具の力

多摩美術大学は
創立90周年を迎えました

企業人事・卒業生に聞く
ルイ・ヴィトンジャパン



生活を潤す 道具の力

食事をしたり、文字を書いたり、毎日の暮らしの中でなにげなく使っているさまざまな道具ですが、作家やデザイナーが介在することで、日々の生活に潤いが生まれ、豊かな時間を紡ぎ出す力を持ちます。単に形の造形にとどまらない、こだわりの道具をつくり続け活躍している卒業生たちが表現によって生み出す価値に注目しました。



「へら絞り」という技術でつくられた銅器『KITTACHI KETTLE』(©Analogue Life)



Photo: 研波 周平 (©組み立て)

職人の新たな可能性を引き出し
遊び心や柔軟な発想を組み込む

工藝デザイナー

YANOBI 井出八州 IDE Yashima | 06年環境デザイン卒業

漆職人の手仕事の奥深さに触れ 工藝の魅力に惹き込まれる

プロダクト・工藝デザイナーとして、日本各地の工房や作家と協働しながらものづくりに取り組んでいます。もともと建築に関心が

あり、多摩美の環境デザイン学科に進学しました。転機となったのは、3年次に参加した産学官共同研究。江戸川区の職人に向けたプロダクト提案に取り組む中で、漆職人との出会いがあり、その経験を通して工藝における手仕事の技術や思想の奥深さに触れ、日本文化の豊かさと工藝の魅力に惹かれたのです。

卒業制作では有田焼の窯元に約1か月間住み込み、器づくりを基礎から学びました。手作業の積み重ねや素材の性質を肌で感じ、ものづくりの根底を実感しました。この経験こそが、現在の原点となっています。

卒業後は工藝に関わる事がしたいと考え「SIMPLICITY」に入社し、プロダクトデザイ



左上:茶筒に茶葉をすくう機能を加えた『波茶筒櫻井』(©開化堂／櫻井焙茶研究所)、右上:卒業製作がもとになった磁器シリーズ『snow plate』有田焼
左下:木材を「へぐ」という技術でつくられた『剥木板皿』、下中:千利休の作と伝わる国宝茶室【待庵】の旧屋根材を使用した『茶香筒』、右下:『KITTACHI MUG』有田・伊万里焼 (©Analogue Life)

ナーとしてのキャリアをスタート。約10年間 在籍し、デザインの手法やトーンを学ぶとともに、全国の工房や職人と多様なプロダクト開発に携わりました。現場に足を運び、素材や技術を理解し、対話を重ねながら形していく姿勢は、この時期に培われたものです。

依頼する工房には必ず足を運び 素材の特性や技術の背景を把握

同じく多摩美出身のグラフィックデザイナーである妻と共に「YANOBI」を立ち上げ、2016年に独立しました。それぞれが個別のプロジェクトを持ち、ブランドのコンセプトやグラフィック、オリジナルプロダクトまで共同で手掛けることもあります。プロダクト制作の依頼を受ける際は、素材からイメージを広げ、クライアントの要望に応えた複数のコンセプト案を用意します。制作を依頼する工房には必ず足を運び、素材の特性や技術の背景を把握します。職人の思考を理解し、対話を積み重ねることで、新たな可能性を引き出すためです。実用性に加えて遊び心や柔軟な発想を組み込み、素材そのものの持ち味が自然に立ち上がるよう意識しています。

プロダクト製作において、私は工藝的な感覚を重んじています。クライアントからは、サンプルの技術を見て「こんな技法や表現が

あったのか」と驚かれることもあります。パティスリーブランド「PÂTISSERIE ASAOKI IWAYANAGI」のクレープスタンドは、新潟県燕の職人が「へら絞り」という手加工で一つひとつ成形したもの。お菓子がひとつずつ丁寧につくられているからこそ、スタンドも手加工にするべきだと考えました。表面のわずかな風合いや手仕事の痕跡を残し、使い手の中に自然と愛着が芽生えるような佇まいを意識しています。たとえば、金属をはじめとする素材の変化もデザインの一部です。塗装で本来の表情を隠さず、経年変化や個体差を魅力として扱います。一つ一つの個体に使い手ならではの風合いが宿り、使い込むほどその人だけのものとなり愛着が深まっていく。そうした時間の蓄積こそ、プロダクトと持ち主の関係を形づくる要素だと捉えています。柔らかな曲線やわずかな手仕事の跡に温度を感じられるものを目指しています。工藝の核となる魅力をシンプルに造形し、余計な装飾を排した美しい佇まいへ。シンプルさと余白は、私の表現において不可欠な要素です。

現代の暮らしに寄り添い 伝統を尊重した道具に

私は自ら手を動かすことも好きですが、それ以上に職人とともに考え、発想を広げる役

割に魅力を感じています。また、さまざまな素材や職人と一緒にものづくりを行うこと自体が好きだという思いもあります。素材や技法の特性を踏まえながら、柔軟に提案を重ねるプロセスこそが、新しい価値を生み出すことにつながると思っています。デザイナーとしていろいろな可能性を追求したいです。

今後は、領域をさらに広げながらものづくりに挑戦していくつもりです。現在文化庁の取組みに関わる形で、茶道をより身近に愉しめる茶道具の開発にも携わっています。伝統を尊重しつつ、現代の生活に寄り添う形で新しい価値を提示する試みです。

デザイナーに限らず目標を目指す方に伝えたいのは、粘り強く取り組む姿勢の大切さです。実は、SIMPLICITYへの入社は3度目の挑戦でようやく叶いました。初めは不採用でしたが、卒業制作を携えて再挑戦したこと、道を切り拓くことができました。やりたいことに本気で向き合えば、次の選択肢が少しづつ見えてくるものです。その実感は、現在のものづくりの姿勢にもつながっています。

いで・やしま

1982年長野県安曇野市生まれ。多摩美術大学環境デザイン学科卒業。株式会社SIMPLICITYのプロダクトデザイナーを経て、2016年より独立。2019年から長野県松本市を拠点に活動。伝統工藝をベースとしたブランディングや、全国の職工・作家と協働しプロダクト開発を手掛ける。



左から：崔聰子、藏原智子

器は人の手に渡ったあとに 生活で活かされて初めて完結する

崔 生活や器に興味があって入学したんですけど、当時は前衛的な立体作品を制作している教授の影響が強くて。同期はその影響を受ける一方、「なんで器じゃダメなんだろう」とふたりでよく話し合っていました。

そんななか、3年生のときに石膏型と転写を習ったんですね。同じ形が何個もできたり、転写ができることがすごく面白く、遊び半分で何かやってみようと。お世話になった方への贈り物をふたりで一緒に制作したこときっかけに、本格的にふたりで制作するようになりました。

藏原 最初の個展では同じ型で100個の陶器を作り、一枚の風景写真をそれぞれに分割して転写しました。原型は工業製品と違って搖らぎがある形なんですが、並べるとまとまりのあるものとして見えてくる。風景写真も分割して刷ることで、一個ずつは抽象的に見えるけれど、並べると景色が見えてくるんですね。そういう陶器の搖らぎや、見る人の記憶と紐づく「ここではないどこか」のような情景を当時からキーワードにして制作を続けています。

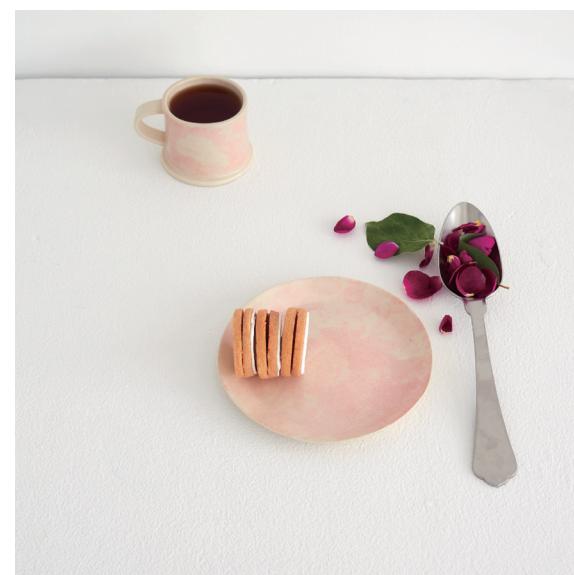
アートとクラフトの間で 「メディアとしての器」を問い合わせ続ける

陶芸作家ユニット

Satoko Sai + Tomoko Kurahara

| 02年工芸卒業

20年も活動して来れたのは、本当にふたりの見たいものが共通していたのだと思いますね。



カップとプレートのシリーズ『grandmothers -クリスティー-』(写真：森本美絵)

さとこ・さい + ともこ・くらはら

崔聰子と藏原智子による陶芸作家ユニット。共に多摩美術大学工芸学科にて陶を専攻し、2002年卒業と同時に共同制作を開始。シルクスクリーンによる陶器への転写や石膏型を使った鋳込みや型押しによる成形など、量産技術と手仕事を組み合わせることで、「中量生産」でありながらも制作の過程で生まれる偶発的な個々の表情を追求している。



左：イラストレーターの前田ひさえさんとのコラボレーション『carat』、右：フィンランドやアラスカなどの風景写真を転写したシリーズ『north cup』(写真：江原隆司)





左:KIGIのプロダクトレーベル「ASSEMBLEDISASSEMBLE」のアイウェア『TWOFACE』、右:KIGIとマザーレイクプロダクトによるプロダクトブランド「KIKOF」の器



道具はただ便利なだけではなく 特別な時間を彩る存在であってほしい

KIGI／クリエイティブディレクター・アートディレクター

植原亮輔 UEHARA Ryosuke | 97年テキスタイルデザイン卒業

違和感がひらめきを生む “便利”を超えたプロダクトの楽しさ

僕の肩書きはアートディレクター、またはクリエイティブディレクターです。個人の活動もあれば、クリエイティブユニット「KIGI」としての活動もあります。花瓶、食器、メガネなどのプロダクトデザインからブランドや商品のプランディング、スイーツブランドの

ラフィックデザインを軸に考えるので、コンセプトから発想する場合もあれば単純に視覚的な面白さや美しさから発想することも多いです。『酔独楽』という盃は、飲み干さないと置くことができません。そして、こぼれないようにそっと飲む必要があります。『酔独楽』を使うことで、そうした特別な行為そのものを楽しんでもらいたいという思いがあります。僕にとってプロダクトとは、日常に違和感や発見をもたらすものであってほしい。だから、毎日使われなくとも良くて、何か特別な時間を彩る存在であってほしいと考えています。

「KIGI」のものづくりは、渡邊良重とふたりでつくることで、発想が広がり、判断が早くになります。ひとりで考えると、どうしても自分の好みに寄せてしまい、地味なものになってしまうけど、ふたり一緒に「いいね！」と言い合えるようなものを考えると、別の視点からもアイデアが生まれ、デザインの幅も広がります。そして多くの人に好まれる方向にデザインは成長していきます。

アイデアを生み出すために必要なことは、毎日考え続けることです。日々のスケッチ、観察、ちょっとした考えを蓄積しておきます。アイデアの方程式、みたいなものをあるとき考えたんですが、それに当てはめていくことで、制作に勢いができます。「アイデアは



カップの鏡面にソーサーの柄が映りこむD-BROS
『Mirror Cup&Saucer』

パッケージデザイン、展覧会の空間やグラフィック、CMや動画のディレクション、アート制作など、さまざまなクリエイティブに携わっています。

プロダクトをデザインするとき、機能性はまず頭から外して考えることが多いです。グ



飲み干さないと置くことができない盃D-BROS×KIGI
『酔独楽』

降りてくるもの」と言われますが、何もないところからは生まれません。考え続けることで降ってくるのです。

ものづくりの楽しさは、大学時代に培われたものです。テキスタイル科にいながら、本当はグラフィックの勉強がしたかったので、自分のつくりたいグラフィックをテキスタイルに変換しながら制作を楽しんでいました。課題提出後の講評の時間に、褒めていただけたことも自信につながりました。

うえはら・りょうすけ

1972年北海道生まれ。2012年に渡邊良重と共に株式会社キギを設立。2024年、「キギと創造株式会社」に社名変更。企業やブランドのアートディレクション、空間ディレクション、プロダクトデザイン、映像ディレクションのほか、アートプロジェクトなどにも参加するなどジャンルに拘らず自在な発想と表現力でクリエイションの新しいあり方を探し、活動している。東京ADCグランプリ・会員賞、東京TDC賞、亀倉雄策賞（第11回）など受賞。



受注生産で手仕事でつくれられるイイダ傘店の傘



お客様に面白がってもらえて イイダ傘店の世界観ができた

傘作家

イイダヨシヒサ IIDA Yoshihisa | 04年テキスタイルデザイン卒業

「傘はやめときなさい」と 言われて挑んだ卒業制作

最初に傘をつくったのは卒業制作でした。当時は仕事にしようなんて思ってもいなくて、

授業で学んだテキスタイルの表現を傘の形にしてみたくらい。6本つくりましたが、アート作品寄りの“使えない傘”でしたね。

卒制の事前チェックのプレゼントで先生たちに「傘はやめときなさい」と言われたことは、いまでも覚えています。布だけじゃなくて、骨や金具も扱う工業製品だから、卒制にはハードルが高いと。でも、天邪鬼な性格の僕は「だったらやろう」と思いました(笑)。

実際に制作に取り掛かると、先生たちの懸念は的中、つくり方がまったくわからない。何軒もお店を回って、唯一話を聞いてくれた傘屋のおばあちゃんのところに通いながら、つくっては見せてアドバイスをもらう日々。押しかけ弟子みたいな感じでしたね。同時に、傘骨で協力してくれるメーカーさんとも出会

えて、どうにか卒制を完成させました。そのときにできたご縁は、今もずっと続いています。

僕がテキスタイルデザインを専攻したのは、予備校時代の先輩の影響と、高校時代に手芸キットでTシャツを染めたり、体育祭のクラスTシャツをつくった経験が大きいです。卒業後は同級生とデザイン会社を立ち上げたのですが、そのときに皆川魔鬼子先生からいただいた「下から上がっていくんじゃなくて、トップから行きなさい」というアドバイスがすごく印象に残っています。小さくコツコツ積み上げるよりも、ダメもとでいいから自分の好きなところ、大きなところに飛び込めと。当時はピンときませんでしたが、デザイン会社を抜けて自分で傘の仕事を始めるときに、



傘のデザインと同じ柄の布製品も手掛けている

その言葉を思い出して、最初から自分が見てもらいたいお店に作品を送りました。それが学芸大学にあったセレクトショップ「バーデンバーデン」。大きくはないけど、好きなお店で、僕の中で一番だと思ったんです。

僕の傘を「すごくいい」と言ってもらえたのですが、「この写真の傘で全部です」と答えたたら、「売るものがないじゃない」と。そこでお店の方が、それならオーダーが入ってからつくれないと提案してくれました。それが「イイダ傘店」の受注生産＆手作業というシステムの始まりです。

最初の受注会では20～30本の注文をいたしましたと記憶しています。当時1本2万円として50万円くらい。材料を買うお金もない時期だったので、本当に糧になりました。頑張って納品して、2回目はさらに注文が増え、そこから全国でも受注会を開くようになりました。

手づくりだからこそ、 細かな好みにも対応できる

うちの傘は基本的には受注制で、布地とサイズ、持ち手を選べるようになっています。持ち手は木の枝を曲げてつくるのですが、節の残り方や木目の出方が一本一本違う。自然の材料で個体差があるのも、一般的な傘と少し違うかもしれません。

お客様からは「赤い糸で縫ってほしい」「ボタンを少し上にして」などの細かいリクエストもありますが、それを受けられるのも手づくりだからこそ。なくしてしまうのは簡単ですが、なるべく続けていきたいと思っています。

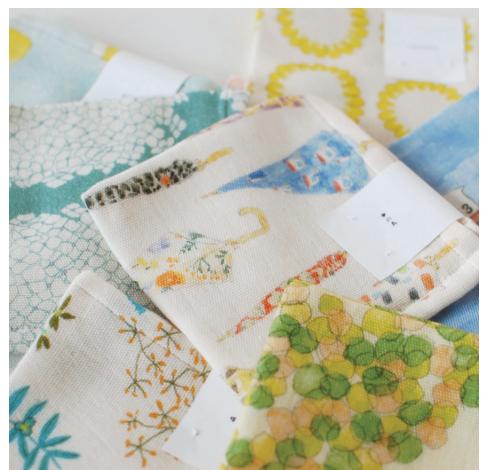
デザインのスケッチは日々描いています。

傘をさしたときにどう見えるか、閉じたときの形は美しいか、内側にいる人が明るい気持ちになれるか。そういうことを意識しています。どちらかというと、モチーフよりも素材からスタートすることが多いですね。毛糸を見て「ふわふわしているな」と思ったとき、八王子のパン屋で食べた180円の甘いだけのシュークリームを思い出して、それをモチーフに柄をつくりました。昔デザインしたのり弁柄の傘もそうですが、最初は深く考えずにつくったものが、お客様に面白がってもらえて、そうやってイイダ傘店の世界観ができていきました。

最近は完成品の傘を並べた催事も増えていますし、昔から修理もずっと請け負っています。さらに今年の20周年を機に、布の張り替えもスタートしました。手間がかかるので「修理するより新品を買ってください」というのが一般的なのかもしれません、そこはひとつ挑戦です。

先日、「傘のポートレート」という企画で、修理前の傘を撮影して本にまとめたのですが、20年も使ってくださっている方もいて、愛着を持って長く使ってくれていたんだなと、すごくうれしかったですね。

なぜあのとき、卒業に傘を選んだのか。やっぱり僕は使えるものに興味があったんだと思います。一見テキスタイルとはグラフィック的な世界という印象が強いのかもしれません、実際は立体で、触られて、布の風合いがある。だからこそ、いろいろな可能性がある「素材」と思うことができたんです。「布は平面ではなく、立体物」。多摩美でそれを学び、しっかり向き合えたことが、自分のものづくりの根っこになっていると思います。



雨傘・日傘の生地で制作した布モノなど、日常に彩りを持たせる小物も制作している。上：ミニタオル、下：くるみボタン

いいだ・よしひさ

多摩美術大学を卒業後、株式会社セルディビジョンの立ち上げに参加。独立後の2005年、傘作家となり「イイダ傘店」を開始。受注会によるオーダーをもとに、日傘や雨傘を手作業で製作している。ほかにも布製品、紙製品などを制作し、異業種とのコラボレートも行う。

左上：傘を広げたときのワクワク感を考えてデザインを考える、左下：イイダさんによるテキスタイルのためのデザインスケッチ





キャンディやケーキなどのお菓子から動物まで、さまざまなデザインのガラスペンをなめらかな書き心地のペンを目指して一つひとつ手づくりしている



文具としての機能を保ちながら 愛着の湧く“宝物”に仕上げていく

ガラス作家

森永久美子 MORINAGA Kumiko | 99年クラフトデザイン卒業

イメージ通りの形を描くために 選んだ耐熱ガラスのバーナーワーク

私が運営する「ぐり工房」では、ガラス棒を卓上バーナーで溶かして加工する「酸素バーナーワーク」という技法を用いて制作したアクセサリーやガラスペンを販売しています。工房で使用しているボロシリケイトガラ

ス（耐熱ガラス）は、一般的なソーダガラスと比べて膨張率が非常に小さく、火にかけても割れにくいところが特徴です。粘性が高いため溶けてもドロドロにならず、冷やして固めると造形にエッジを残すことができます。もともとは卒業制作で“透明の木の実”を表現したいと考えていた際にこのガラスと出会い、自分がイメージした通りの曲線をつくりやすい点に惹かれました。素材の特性と作家の技術が融合することによって美しい曲線が生み出される。この自然と作意のバランスこそがガラス作品の魅力であり、卓上バーナーを用いたシンプルな工程で素材をコントロールできる点におもしろさを感じています。

手づくりだからという理由だけでは 価格の価値につながらない

大量生産品と比べて、手づくりの作品が高価になるのは当然です。しかし、その理由が「人がつくっているから」というだけでは、価値を認めてもらうことは難しいでしょう。実際、私が販売を始めた当初は買ってくれる人が少ない状況でした。転換点になったのは、ミンネやクリーマといったハンドメイドに特化した販売サイトができたことです。手づく

りの魅力を理解し、それを買いたいと思っている人が集まるマーケットで作品を販売できることに希望を感じました。同時に、そうしたサイトが流行したことで、心を込めてつくられた道具に高い価値を感じてくれる人の層が広がったように感じています。

どれだけ心を込めるかによって作品の価値が変わると実感してからは、以前にも増して一切妥協せずに作品づくりに励んでいます。特に意識を強めたのは、ガラスペンの制作を始めたタイミングでした。装飾品であるアクセサリーとは異なり、ガラスペンは明確に文具としての機能性が求められます。そのため、ぐり工房ではあえて制作していなかったのですが、世の中の需要の高まりを感じて制作に着手。単に既製品の形を模倣するだけでは道具へのリスペクトに欠けていると考え、人間工学的にペンを分析した論文や、ガラスペンに関する映像を使って理解を深めました。今後も心を込めた丁寧な制作を続け、私の作品を好きだと言ってくれる人々に喜んでもらえるガラス作品を届けたいと思います。

もりなが・くみこ

2002年から自宅の一室でガラスアクセサリー制作を開始。現在は「ぐり工房」の代表としてガラスアクセサリーやガラスペンなどを制作・販売するほか、体験制作なども実施している。



パフェやがま口など、ユニークなモチーフのガラスペンも



日常の道具に潜む面白さで 手に取った人を笑顔に変えたい

株式会社スガイワールド代表取締役

須貝 悠 SUGAI Yu | 04年情報デザイン卒業

関わるすべての人が幸せになれる ものづくりを意識している

2011年に遊び心あふれる商品を企画・製造するメーカー『スガイワールド』を立ち上げました。スガイワールドでは、私自身が商品の企画やデザインを手掛け、ユニークでありながら環境にも配慮したプロダクトを数多く生み出しています。

もともと会社員時代から、通勤電車の中で日々の生活をちょっと快適にするアイデアをノートに書きためるのが習慣で、それを誰かに見せて、反応をもらうことが楽しみのひとつでした。

そんな日々の中で「そのアイデアを形にしてみたら？」と背中を押してくれる人が増えていき、アイデアのひとつである「ひげ付箋」を制作したことが活動の始まりです。最初は「本当に売れるのだろうか？」という不安もありましたが、発売から半年足らずで4000個の在庫が完売。その利益を元手に「クリップファミリー」「アニマルハグ」「ティップトーズ」「モンスタークリップ」など、新しい商品を次々と生み出していました。

私が目指しているのは、手にするだけで気分が少し上がるようなものをつくることです。例えば「ひげ付箋」は、使う人に楽しい気持ちになってもらえたならという想いから生まれました。生活必需品でなくても、日常の中に小さな喜びや余白をつくる。そんな商品を形にすることが、自分の役割だと考えています。

スガイワールドのコンセプトは「Happy Design Gift Maker」。普段から「付箋が付け髪だったら面白いな」、「ドアノブがスノードームだったらかわいいのに」といった、日常の道具に潜む面白さを見つける視点を大切にしています。もちろんアイデアやデザインは大切ですが、それ以上に資源を供給する人、印刷・流通に関わる人、そして使う人まで、関わるすべての人が幸せになれるものづくりを意識しています。そのため、FSC認証紙など環境負荷の少ない素材を使い、製造から廃棄までのプロセスを丁寧に考えることを心がけています。

現在の活動の背景には、多摩美時代に築いた人間関係が大きな影響を与えています。ほぼ24時間生活を共にし、仲間とチームで何かをつくり上げた経験は、今の自分の土台です。当時の仲間はそれぞれ異なる分野で活躍して

須貝さんのアイデアスケッチ。そのファイルは何冊にも及ぶ



いますが、そのつながりは今も力になっています。多摩美で得たのは技術以上の、人とのつながりとものづくりを楽しむ感覚。そして、まずやってみようという空気感が、現在のものづくりへの姿勢につながっています。

すがい・ゆう

デザイン会社やメーカーの商品部勤務を経て、2011年に「スガイワールド」を立ち上げる。「Happy Design Gift Maker」をコンセプトに、商品の企画・デザインを手掛けている。2018年に文房具屋さん大賞クリップ賞第1位、2023年にLIFE×DESIGNアワード ベストサステナビリティ賞を受賞。



左上：水で曲がる紙クリップ『クリップファミリー』、左下：須貝さんが初めて手掛けた『ひげ付箋』



Tamabi 90th Anniversary

90周年メモリアルラウンジ アートテークを開設

創立90周年記念事業の一環として、本学の学生、教職員を対象とした「メモリアルラウンジ」を2025年9月16日に新しく開設しました。場所は八王子キャンパス アートテーク2階。ラウンジ内には、ソファ席、カウンター席、テーブルを設置し、本学の学生、教職員であれば開室時間中、自由に利用することができます。壁面には、本学創立から現在までの90年間の出来事をまとめた歴史年表のパネルを設置し、当時の写真や資料とともに本学の歴史をご覧いただけます。



「メモリアルラウンジ」は、八王子キャンパス アートテーク2階。月～土曜の9:00～18:00常時開放しています

「多摩美術大学90年の歩み」 記念誌も発行されました

90周年の記念誌も発行され、来賓や卒業生に配られました。来春には全学生にも配布予定。下記からデジタル版も閲覧できます。

10月18日、創立90周年式典が行われた八王子キャンパスには90周年を祝う装飾がほどこされた



多摩美術大学は 90周年を迎えました

帝国美術学校は、当時の美術教育が型にはまりつつあることを危惧し、官立のアカデミズムから距離を置いた「自由な校風」を目指して1929年に各種学校として設立される。校長の北玲吉は、手狭になった吉祥寺からの移転と、専門学校への昇格を提案するも校主側から反対され、移転反対の校主派と移転推進の校長派に分裂。校長以下多くの教員と学生が1935年上野毛の地で新たに自由な教育を目指し、初代校長杉浦非水のもと多摩帝国美術学校が創設された。

10月18日記念式典を 八王子キャンパスで開催

多摩美術大学は、2025年で創立90周年を迎え、10月18日、八王子キャンパスで「創立90周年記念式典」を開催いたしました。

式典は、東京音楽大学の学生による弦楽四重奏で始まり、内藤廣学長の挨拶に続き、本学卒業生が監督・撮影し、在学生が制作に参加した創立90周年記念映像を上映しました。来賓の紹介とともに祝賀のビデオメッセージが流され、式典後半には、「TAMABI BEYOND ~今までの多摩美を見つめ、多摩美を超える~」をテーマにシンポジウムを開催。式典終了後は、本部棟大会議室にて祝賀会を開催し、青柳理事長の挨拶の後、本学学生による記念パフォーマンスも披露されました。



アーティスト Karen Hofmann 学長からの祝賀のビデオメッセージが届きました

校友会創立30周年記念 ガーデン同窓会2025も同時開催

式典と同日の午後には、八王子キャンパスAホールにて、多摩美術大学校友会創立30周年記念「ガーデン同窓会2025」が開催されました。学生によるテキスタイルパフォーマンス、校友会中村会長、本学青柳理事長、内藤

学長による挨拶の後、校友会より本学へ寄付金が贈呈されました。学内展「多摩美校友会ホームカミング展2025」での受賞者への表彰およびキャンパスの建築に関するトークイベントに続き、ホワイエでの立食パーティが催され、学生による和太鼓の演奏や相生道部の演武も披露されました。その後、アートテークギャラリーに移動し、受賞者によるアーティストトークも行われました。



校友会30周年式典後のガーデン同窓会の模様

上野毛に新校舎建設 2026年度より利用開始

90周年を迎えるにあたり、多摩美術大学誕生の地である上野毛キャンパスに新棟(仮称)を建設しています。アートが新しい世界像を具現化し人々の心を動かす。デザインが私たちの社会を望ましい状態に導く。これらを実現するためには、学生や教員が自身の創造性を育むことができる空間が必要となります。

学生の作品をはじめとした様々な創作物が展示される1階のギャラリーは、環状八号線沿いに面し、大屋根と天井高の高い空間は、地域住民の方々を歓迎します。また、共同作業やコミュニケーションを促進する各階のスペースでは、アートやデザインの枠を超えた活発な交流が期待できます。

上野毛キャンパス新棟(仮称)
は、2026年度使用開始予定



創立90周年記念学内展も 全学的に開催されました



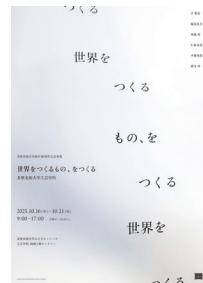
日本画／油画／版画合同展「Tamabi Beyond, at the 90th Anniversary」10月17日—25日



建築・環境デザイン「建築・環境デザイン学科の現在」10月16日—21日



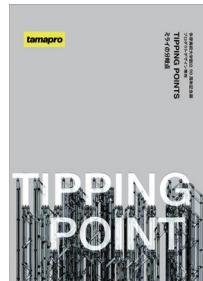
彫刻「トウクトウクを使った移動展覧会」10月18日



工芸「世界をつくるもの、をつくる」10月16日—21日



グラフィックデザイン「Tamabi 20s——新たなクリエーションの記録」10月18日—29日



プロダクトデザイン「TIPPING POINT ミライの分岐点」10月18日—25日



テキスタイルデザイン「多摩美テキスタイルの軌跡」10月16日—21日



メディア芸術「メディア芸術グランバザール」10月18日



情報デザイン「EXHIBITION: 情デの本棚」10月17日—21日



芸術学「芸術学科シンポジウム I, II」9月20日、10月11日



統合デザイン「これからのデザイン、これからの統合デザイン」2026年1月15日—18日



演劇舞踊デザイン「90年のステージへ—演劇舞踊デザイン学科のこれから」9月13日—15日



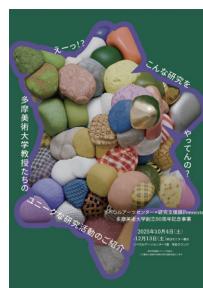
リベルアルアーツセンター プレ・イベント第一弾「八王子芸術祭キックオフ・トークショー」10月4日



リベルアルアーツセンター プレ・イベント第二弾「明和電機 ライブフォーマンス+トークショー」10月11日



リベルアルアーツセンター 創立90周年記念レクチャーシリーズ「教養総合講座」後期授業期間水曜日



リベルアルアーツセンター×研究支援課「えーっ！？こんな研究をやってんの？—多摩美術大学教授たちのユニークな研究活動のご紹介」10月4日—12月13日



デザイン系学科合同展「タマビ防災EXPO 2025—美大が考える防災のカタチ」7月2日—10日



大学院「90周年記念博士展」10月18日—23日



一般社団法人多摩美術大学校友会「多摩美校友会 ホームカミング展 2025」10月8日—23日



多摩美術大学図書館 10月13日—25日 アートとデザインの人類学研究所 10月14日—22日



多摩美術大学美術館 「EXPLOSION & EXPANSION 爆発と拡張——多摩美術大学の制作の現場から」10月19日—11月3日



アートアーカイブセンター 「菅木志雄のペーパーワーク Archives & Recent Works」11月8日—11月29日



TUB「TUB showing 2025」9月25日—10月1日



Up & Coming「歴史は繰り返さないが、韻を踏む: Chronicle Vol.3」11月15日—12月23日

企業の人事担当者・卒業生に聞く

多摩美への期待と実績

多摩美出身者は、ビジネスの最前線からどのような評価を受けているのでしょうか。また、その卒業生たちが学んだ多摩美での4年間は、ビジネスの現場でどう生かされているのでしょうか。さまざまな業界で活躍する企業人たちに尋ねました。

メーカー

ルイ・ヴィトン ジャパン

本記事は連載企画です。さらに詳しい内容や
他企業情報はWebでご覧になれます。



1854年にパリで旅行鞄専門店として創業したルイ・ヴィトンの日本法人で、製品の輸入・販売・ケアサービス等の業務を取り扱っている。トランクや鞄のみならず幅広い製品を展開し、世界的な総合ラグジュアリーブランドとして発展。製品からサービスまで卓越性を追求し、環境保護や多様性、地域貢献など社会的責任に取り組んでいる。

多摩美で培ってきた観察眼や審美眼が、 長く愛されるブランドを 支える力になる



クライアントケアサービス ケアサービスアトリエ
レザックストラオーディネル アトリエマネージャー

丸山達也さん

私たちの部署は、ルイ・ヴィトン製品を長く良い状態で使っていただくため、メンテナンスやカスタマイズを行うケアサービスを担当しています。カスタマイズの中でも、伝統的なサービス「パーソナライゼーション（イニシャルやマークを鞄に描き、自身のものと認識できるようにする）」は重要で、これを現代風にアレンジして行っています。私たちのようなアトリエを持つのは世界でも数少なく、本国のパリのほかには、アメリカ、中国だけです。

石橋さんはパーソナライズに特化したペインティングを、大野さんは長年の使用で変色した部分などを周囲に合わせて補修するレザーケアを担当しています。2人とも学生時代から培ってきたセンスや色彩感覚を活かして活躍しています。お客様の期待を超えるサービスには、責任感や慎重な対応はもちろん、ニーズを見極める力、探究心が欠かせません。そういう姿勢で仕事に取り組める人たちの活躍に期待しています。



クライアントケアサービス ケアサービスアトリエ
ペイント

石橋麻衣さん

(22年日本画卒)

私は、トランクなどをパーソナライズするペインティングを担当しています。お客様の希望を伺い、模様や絵を描いて、世界にひとつだけの特別な品に仕上げる仕事です。「どのように使いたいか、どこに置きたいか」なども含めて、お客様の希望を詳細に伺って相談しながらデザインを提案し、決定後にペイントしてお渡しします。

イベントでお客様の好みなどを伺いながら提案したときに、「こんなに私のことを考えててくれてうれしい」と感動し、涙を流してくださったことは印象的でした。後日お礼の手紙もいただき、この仕事を選んで本当によかったです。イベントでは、購入前のお客様にシミュレーションを見せ、そこから購入につながることもあります。買う体験そのものが思い出となり、価値を感じて喜んでいただける瞬間に、この仕事の特別さと楽しさを実感します。お客様の思い描くデザインをつかめず、何度も提案を繰り返すこともありますが、完成品に満足し喜んでいただけたとやりがいを感じます。

多摩美の油画科では、「美術とは何か?」という本質的な問いを考えたり、新しい表現に挑戦したりと、アートを深く学ぶ機会がありました。

そのなかで培った探究心や好奇心が、今の自分を支えています。お客様のファッショニや雰囲気から好みを想像し、先回りして提案できるのも、多摩美での経験のおかげです。そこで身につけた観察眼や洞察力が、今の仕事につながっています。学生時代は行動力が大事です。少しでも心が動いた展示にはすぐに足を運び、美しいと感じたものを自分の表現に取り入れてみてください。多摩美には特別講義や実習、イベントなどが数多くあります。チャンスを逃さず行動してみましょう。



クライアントケアサービス ケアサービスアトリエ
クラフツマン

大野美森さん

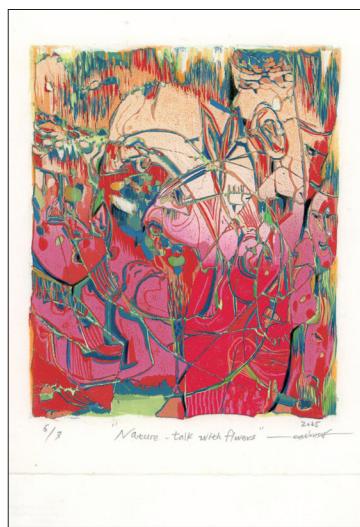
(24年日本画卒)

私は、お客様の大切な鞄などを預かりし、補修するレザーケアを担当しています。お客様が長く愛用してきた製品にはひとつとして同じものではなく、変色の度合いや色の剥げ方もさまざまです。そのたびに最適な手順を考えながら作業を進めます。先輩のアドバイスを受けつつ試行錯誤していますが、経験を積むなかで、以前携わったケースを思い出して工夫を重ねながら仕上げられるようになりました。技術の成長を実感できることにおもしろさを感じます。

作業中は「お客様がその鞄をどのように大事に使ってきたのか」と想像し、その大切な品に携わることに喜びを感じます。修理中には新たなダメージを与えないよう手順を慎重に検討します。仕上がりが美しいだけでなく、今後も安心して使えるよう革にも栄養を与え、長く大切にしてもらえる仕上げを心がけています。「この先もこの鞄と一緒に頑張っていきたいな」と思っていただけたら、本当にうれしいです。

日本画科での学びには、今の仕事に通じる経験が多くありました。まず、描きたいものをしっかり観察する力を培えたこと。レザーケアでは傷の状態や色の変化を正確に見極めなければ、適切な補修方法を選べません。また、日本画の岩絵具を扱った経験も大きかったです。岩絵具は水彩と違い、絵具を盛っていく技法があり、ダメージ部分の色を補う際の技術として役立っています。さらに、紙漉きなど伝統技術に触れたことも、長く受け継がれてきたものの価値を理解し、今の仕事に活かされていると感じます。学生時代には、美術作品だけでなく自然の景色や質の高い製品など「良いもの」にたくさん触れ、審美眼を養ってほしいです。自分の表現の引き出しが増え、きっと将来につながる力になります。

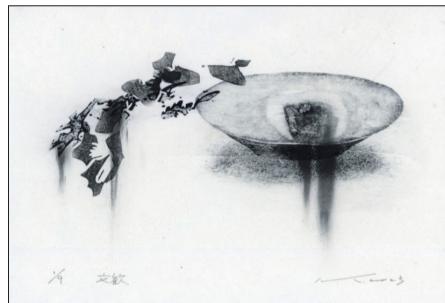




大賞: 李元淑『Nature_talk with flowers』

アワガミ国際ミニプリント展2025で卒業生が大賞を受賞

和紙を使った版画作品の公募展「アワガミ国際ミニプリント展2025」において、14年博士後期課程修了・李元淑さんが大賞を受賞しました。そのほか、14年大学院版画修了・西山瑠依さんと、00年版画卒業・岡本潤さんが優秀賞を受賞しました。本公募展は、徳島県の阿波和紙伝統産業会館が2年に1度開催しているもので、プロ・アマを問わず広く国内外から応募を受け付けています。7回目の開催となった今回は、1,508点の作品が寄せられました。全応募作品の展覧会は、10月11日（土）～11月9日（日）のあいだ、徳島県にて開催されました。



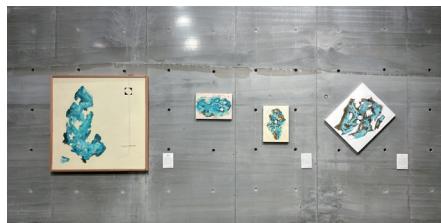
優秀賞: 西山瑠依『交歓』



優秀賞: 岡本潤『Cheese』

産業×アートによる新たなアートプロジェクトで 油画3年・ホウユウさんが最優秀賞を受賞

合同会社なもの／小さな美術館（東京都三鷹市）とシンニチ工業株式会社（愛知県豊川市）が共同開催した大型アートコンペティション「挑戦する若きアーティストたちへ 未来へつなぐアートプロジェクト」において、油画3年・ホウユウさんが最優秀賞を受賞しました。また、油画3年・高田剛伸さんは優秀賞を受賞。現役の美術大学生・芸術大学生から卒業後5年以内の若手アーティストまでを対象にした本コンペティションは、産業×アートによる新たな価値創造を目指して企画されたものです。ホウユウさんの受賞プランにもとづく作品は既に完成しており、シンニチ工業本社の展示スペースが完成次第、恒久展示される予定です。



最優秀賞: ホウユウ 左から『無妄』『太一生水-上』『太一生水-下』『ドウ』



優秀賞: 高田剛伸『大きな胸じゃあるまいし』

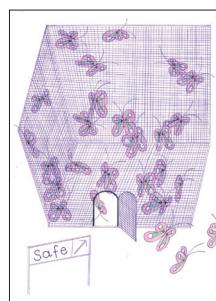
「TOKYO MIDTOWN AWARD 2025」 デザインコンペ部門で卒業生が準グランプリ受賞

「TOKYO MIDTOWN AWARD 2025」のデザインコンペ部門において、24年統合デザイン卒業の村田慶次さんと米谷颯太さんによる作品『みせすきん』が準グランプリを受賞しました。また、グラフィックデザイン4年・岩田湖春さんの作品『Pause 6』もファイナリストに選出されました。「TOKYO MIDTOWN AWARD」は、次世代を担うデザイナーやアーティストの発掘、支援、その先のコラボレーションの創出を目的に、デザインコンペとアートコンペの2部門を設け、幅広く参加作品を募集しているアワードです。今回は、デザインコンペ部門で1,126件、アートコンペ部門で303件の応募がありました。

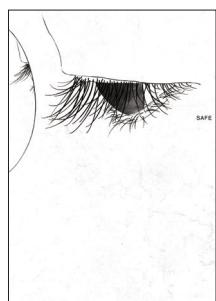
ムラタとヨネヤ(村田慶次、米谷颯太)
『みせすきん』

JAGDA国際学生ポスター賞2025で 銀賞と協賛企業特別賞を在学生複数名が受賞

JAGDA国際学生ポスター賞2025で、グラフィックデザイン4年・田中ろこさんが銀賞と協賛企業特別賞（ライトパブリシティ）、グラフィックデザイン3年・佐々木天音さんが銀賞と協賛企業特別賞（女子美術大学・女子美術大学短期大学部）、統合デザイン3年・リョウ コウタイさんが協賛企業特別賞（光村印刷）を受賞しました。本アワードは日本最大のグラフィックデザイナー組織・公益社団法人日本グラフィックデザイン協会（JAGDA）主催による、国内外の優れた若い才能の発見と顕彰、およびグラフィックデザインの新たな発展と進化を目的に創設されたもので、国籍や年齢を問わず、高校生以上の学生を対象としています。



左: 田中ろこ『safe place ?』、右: 佐々木天音『毛』



「建築新人戦2025」にて 建築・環境デザイン3年・榛葉琉恩さんが入選

建築・環境デザイン3年・榛葉琉恩さんの作品が、2025年9月13日～15日に梅田スカイビルで開催された「建築新人戦2025」において、16選に入選しました。入選した作品は、3年生第1課題（担当：湯浅良介先生・工藤浩平先生）「みんなの居場所／プラットフォーム（想像のレッスン）」にて制作された、『観測者の家（An Observing House）』です。建築新人戦は、一般社団法人日本建築新人戦実行委員会が主催を務め、日本国内の大学・専門学校などで建築を学ぶ学生を対象とした建築設計コンペティションです。



榛葉琉恩『観測者の家（An Observing House）』

上月財団第22回クリエイター育成事業にて 在学生多数が助成対象に選出

コナミグループ株式会社創業者の運営財団、上月財団が文化助成の一環で実施している第22回クリエイター育成事業にて、油画2年・山本翔琉さん、グラフィックデザイン3年・染野涼架さん、メディア芸術3年・古賀俊皓さん、情報デザイン3年・兼子実桜さんが助成対象に選出されました。染野さんは3年連続の選出です。また、今回の募集ポスターの1点は、第19~21回認定者である、19年メディア芸術卒業・上原明日香さんのイラストが起用されています。この助成制度は漫画家・デジタルアーティスト・イラストレーターなどのクリエイターを目指す若者を支援するもので、助成対象者に選出された

30名のうち4名が
本学の学生でした。



染野涼架『甘いもの
たくさん食べたいんだもん』

「ルンド・ファンタスティック映画祭」にて 修了生の木原正天さんが受賞

北欧で最も歴史のあるジャンル映画祭「ルンド・ファンタスティック映画祭」の学生短編映画コンペティション「FUTURE OF FANTASTIC」において、25年大学院グラフィックデザイン修了・木原正天さんの作品『Q』がファンタスティック短編映画賞(Future of Fantastic Short Film Award)を受賞しました。『Q』は、アヌシー国際アニメーション映画祭2025の学生部門(Graduation Films)の主要賞のひとつであるロッテ・ライニガー(LOTTE REINIGER)賞も受賞しています。「FUTURE OF FANTASTIC」は、ホラー、ファンタジー、SFなど多様なジャンルで活動する学生を対象に、学校でのプロジェクトとして制作された作品を募集する国際的な短編映画コンペティションです。



木原正天『Q』

地産地匠アワード2025にて 光井花非常勤講師が準グランプリを受賞

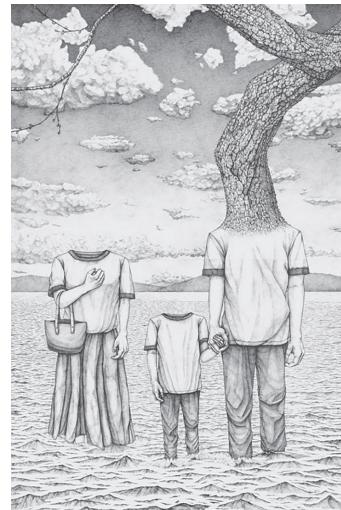
12年テキスタイル卒業、現在同学科の非常勤講師を務める光井花先生が、「地産地匠アワード2025」にて準グランプリを受賞しました。本受賞では、福岡県八女市のかみの糸の機屋、下川織物との協業により開発した「錯覚の糸」の生地を活用したバッグ「KOHABAG -IKAT- 着物幅(小幅)」を活かしたバッグが評価されました。バッグは10月23日より全国の中川政七商店で販売を開始しました。「地産地匠アワード」は、中川政七商店主催の地元生産×地元意匠を意味する「地産地匠」をテーマに、地元メーカーと地元デザイナーの合同プロダクトを募集する唯一無二のアワードです。



準グランプリを受賞した光井花先生
(左から3人目)

日本版画協会「第92回版画展」にて 在学生・修了生が受賞

日本版画協会「第92回版画展」において、大学院版画2年・藤原聖也さんが、一般部門のA部門(額外寸:75cm以上200cm以内)奨励賞を受賞し、また、24年大学院版画修了・佐藤翼さんが準会員部門でSOMPO美術館賞を受賞しました。なお、藤原さんは2年連続で受賞する快挙となりました。本展は、版画美術の振興を目的として1931年に結成された日本版画協会が主催するもので、入選作品は10月に都内で展示されました。



藤原聖也『家族』

グラフィックデザイン4年生ガルネサス エレクトロニクス社オフィスの壁画制作に選出

グラフィックデザイン4年・赤佐氏利さんが、ルネサス エレクトロニクス株式会社による社内壁画制作の学生アーティストを公募する「Renesas × Rising Artist Program」に選出されました。本プログラムは、ルネサス エレクトロニクス株式会社の発足15周年を記念して実施され、壁画制作の経験を問わず、学生に挑戦の機会を提供することを目的としています。全国16校の美術系大学から32名の応募があった中から2名が選出され、赤佐さんは武蔵事業所(東京都小平市)にて、壁画サイズのアート制作を担当しました。



半導体の特性を表現し、社員へのメッセージを重ねた創意あふれる作品

辻惟雄名誉教授が令和7年度文化勲章を受章 野田秀樹名誉教授が文化功労者に選出

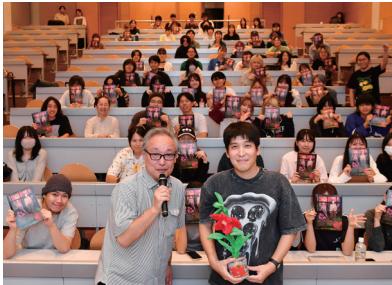
11月3日、多摩美術大学元学長で名誉教授の辻惟雄先生が、令和7年度(2025年度)の文化勲章を受章されました。

また、翌4日には、野田秀樹名誉教授が文化功労者として顕彰されました。文化功労者顕彰は、文化の向上発達において特に顕著な功績を挙げた個人をたたえる制度です。辻惟雄名誉教授は、岩佐又兵衛、伊藤若冲、曾我蕭白などを「奇想の画家」としていち早く再評価し、「かざり」「あそび」「アニメズム」を日本美術の特質に挙げて、装飾工芸から幽霊画、漫画まで幅広く論じています。野田秀樹名誉教授は、劇作家・演出家として数々の話題作を発表してきたほか、オペラの演出、歌舞伎の脚本・演出を手がけるなど精力的な創作活動を行ってきました。

アニメーション映画『ホウセンカ』 多摩美生限定試写会＆木下麦監督トークショー開催

10月1日、アニメーション映画『ホウセンカ』の多摩美生限定の試写会が、全国公開に先駆け八王子キャンパスにて開催されました。この作品は14年メディア芸術卒業・木下麦さんが監督を務め、アヌシー国際アニメーション映画祭2025の長編コンペティション部門に正式出品されています。今回の試写会はメディア芸術コースの特別講義として行われ、上映後には木下監督と本学の寺井弘典教授のトークショーも開催されました。トークショーでは木下監督が『ホウセンカ』制作に込めた想いを語り、トークショー後の質疑応答でも、受講した学生からの質問に対し丁寧に答えていただきました。

多摩美生限定で開催された試写会の様子



二子玉川ライズで 地域連携・共創アートプロジェクトを開催

二子玉川ライズとの地域連携アートプロジェクト「タマリバーズ」を、10月11日に世田谷区玉川の二子玉川ライズガレリアで開催しました。広場演劇『はいしゃっく』の上演に加え、学生が制作したアート作品のチャリティー販売、近隣の保育園児とのコラボレーション企画も実施。「タマリバーズ」は、2011年の二子玉川ライズ開業以来、毎年開催されている地域連携アートプロジェクトです。同じ上野毛キャンパスの統合デザイン学科と演劇舞踊デザイン学科が実践型授業「PBL (Project-Based Learning)」科目として共同運営し、企画立案からコンセプト設計、脚本、演出、衣装、小道具、さらにWEBコンテンツやポスターなどのメディア展開まで、学生主体で取り組んでいます。PBL科目は全学科の学生が履修可能で、例年多数の学生が履修しています。

広場演劇『はいしゃっく』



日本郵船との産学共同研究第2弾 最終成果報告会を実施

9月26日、プロダクトデザイン専攻Studio3の学生が、日本郵船株式会社との産学共同研究「Cozy・Comfy～働く／暮らしの中にある喜び」の最終成果報告会を、東京・丸の内の同社本店にて実施しました。本研究は、循環型社会を目指す共創プロジェクト『するるデザイン』の一環として行われ、学生たちは「働く」と「暮らす」の両面から、船員のウェルビーイングを高める空間や道具のデザインを、社会実装も視野に入れながら提案・発表しました。



学生が提案したアートプロダクト「カラフルウェーブ」

本学図書館がベルギーにて 「死ぬまでに訪れておきたい図書館150」として紹介

ベルギーの出版社「Lannoo Publishers」から出版された建築・観光ガイド本『150 Libraries You Need to Visit Before You Die (死ぬまでに訪れておきたい図書館150)』にて、多摩美術大学八王子キャンパス図書館が紹介されました。本図書館は、建築界のノーベル賞と称されるプリツカービル建築賞を受賞した伊東豊雄監修教授が設計を手掛けたものです。『150 Libraries You Need to Visit Before You Die』は、世界各地の個性豊かで美しい図書館を紹介しており、日本からは本学を含め6つの図書館が選出されています。



多摩美術大学図書館
(八王子キャンパス)

JTBと多摩美術大学が、カプセルトイを使った 八王子の魅力発信で全国初の協働

多摩美術大学の学生が、「交流創造事業」をドメインとするJTBと連携し、地域の魅力を発信するプロジェクト「街がチャin多摩」をスタートさせました。第一弾では八王子をテーマに、観光スポットや地元で愛されるお店をモチーフにしたアクリルキーホルダー全10種が登場。本学の絵本創作研究会の学生が企画から手掛け、親しみやすく、ユーモアと温かみのあるデザインに仕上げています。カプセルトイ（ガチャ機）は、2026年4月24日まで、多摩美術大学八王子キャンパスグリーンホール、高尾山口観光案内所、JTB八王子北口店、JTBトラベルゲート立川など、多摩エリア10か所に設置予定です。



八王子キャンパスグリーンホールに設置されたカプセルトイ

JR東日本と連携して 「エキナカ」で美術展を開催

東日本旅客鉄道株式会社（JR東日本）横浜支社と本学の学生が連携し、10月14日から11月20日まで、本学八王子キャンパス最寄りのJR橋本駅改札内にてアート作品を展示する「エキナカ美術館『美旅』」を開催しました。エキナカ美術館『美旅』は、芸術祭実行委員を務める本学の学生たちが「旅」をテーマに制作したアート作品を通して、旅の魅力を発信し、美術をより身近に感じてもらうことを目的としています。

エキナカ美術館
『美旅』ポスター



八王子キャンパスで 夏のオープンキャンパスを開催

7月19日、20日、八王子キャンパスで夏のオープンキャンパスを開催しました。昨年同様完全予約制とし、作品展示や授業公開、教員や職員との相談に特化し「大学での学び」を体感してもらうことを重視。2日間で合計13,908名の参加者があり大変にぎわいました。6月8日にはオンライン版、9月28日には進学相談会メインのオープンキャンパスも実施しました。



昨年より約1,500人多い来場者でぎわった夏のオープンキャンパス

卒業制作展・大学院修了制作展



本年度の卒業・修了制作展は、下記の開催を予定しています。また、学科ごとあるいは個人・グループによる展示が東京、神奈川などキャンパス内外のアートスペース各所で開催されます。

八王子キャンパス学内展



2025年度学内展ポスター・ビジュアル

多摩美術大学博士課程展 2026

2026/2/25(水)～3/8(日)

10:00～17:00

A日程：

2026/1/9(金)～12(月・祝)

10:00～18:00

日本画、油画、版画、彫刻、工芸、テキスタイルデザイン、建築・環境デザイン、メディア芸術、情報デザイン

B日程：

2026/3/13(金)～15(日)

10:00～18:00(最終日15:00まで)

グラフィックデザイン、プロダクトデザイン、芸術学、統合デザイン、演劇舞踊、劇場美術デザイン

東京五美術大学連合卒業・修了制作展

2026/2/20(金)～3/1(日)

10:00～18:00(入場は17:30まで)

2/24は休館

国立新美術館

Up & Coming



Up & Comingは卒業生の発表活動を支援し、新しい表現を発信するオルタナティブ・スペースです。アーティストの自己プロデュースによる企画展によって、多くのひととへ創造のよろこびを伝え、新たな時代精神を生み出す場となることをめざしています。

渋谷区神宮前3-42-18 | 12:00～19:00(金曜・土曜は20:00まで) | 火曜休場 | 入場無料

2026/1/11(日)～2/14(土)

明日は生まれたてだから

制作期間における時間の移ろいや感情の変化、試行錯誤の痕跡などを記録・展示し、会期を迎えるまでの日々のドキュメンタリーのように構成する。

出品作家＝安藤綾、合田有希、藤瀬碧央、まさだすずみ



2026/2/21(土)～3/29(日)

What the Clay Remembers/ 土が覚えていること

陶という素材を軸に、6名の作家がそれぞれの視点から素材との応答やプロセスに向き合い、陶表現の拡張を探る試み。

出品作家＝鯨虎じょう、伊勢崎寛太郎、大井真希、後藤美穂、田村麻未、森川裕也

多摩美術大学 TUB



「まじわる、うみだす、ひらく」をコンセプトに、オープンイノベーションによる価値の創出、幅広い層に向けたデザインやアートのプログラムの提供、学生作品の展示・発信を通してデザインとアートの持つ創造性と美意識を社会とつなぐ場を提供しています。

港区赤坂9-7-1ミッドタウン・タワー5F(東京ミッドタウン・デザインハブ内) | 11:00～18:00
| 日曜・月曜・祝日休場 | 入場無料

12/1(月)～2026/1/12(月・祝)

12/27-1/5は休館

東京ミッドタウン・デザインハブ第117回企画展

「植える WELL-BEING」

OUR TOOLS & METHODS FOR WELL-BEING

「WELL-BEINGを満たすための知恵と工夫とは」を出発点に、さまざまな方の暮らしや仕事から紡ぎ出された知恵や工夫を紹介し、教育の根底にある未来への種を植える行為と、デザインがもたらすWELL-BEINGの姿を見つめます。



アートテークギャラリー



八王子キャンパス内 | ギャラリー開場時間10:00～17:00(展覧会による)

日曜・授業日以外の祝日休場 | 入場無料

最新情報は大学HPでご確認ください

2026/3/6(金)

学内共同研究「改変された絵画—その時画家はなぜその絵を描き変えたのか」シンポジウム

EXHIBITION & THEATER

12/6(土)～2026/3/22(日)

横浜美術館

横浜美術館リニューアルオープン

記念展

「いつもとなりにいるから

日本と韓国、アートの80年」

彫刻・高嶺格 教授(出品作家)

2026/2/5(木)～2/15(日)

ザ・スズナリ(東京・下北沢)

「The Weir(ザ・ウェア)～堰～」

演劇舞踊デザイン・加納豊美 教授

(衣裳デザイン)

12/20(土)～2026/3/8(日)

京都国立近代美術館

「セカイノコトワリ—私たちの時代の美術 #WhereDoWeStand? —Art in Our Time」

彫刻・笠原惠実子 教授(出品作家)

彫刻・高嶺格 教授(出品作家)

2026/1/10(土)～1/23(金)

スパイナルガーデン

文化庁事業「Kogei meets...」

出会いから生まれるかたち」展

リベラルアーツセンター・外館和子 教授
(キュレーション)

BOOK



この社会に、
建築は、可能か
伊東豊雄 著
(大学院客員教授)
青土社
2025年5月26日刊
5,940円(税込)



建築家・内藤廣
赤鬼と青鬼の
場外乱闘
内藤廣 著(学長)
グラフィック社
2025年7月8日刊
2,420円(税込)



君はポップな
日本の詩(句集)
山岸竜治 著
(リベラルアーツ
センター教授)
東京四季出版
2025年6月21日刊
2,200円(税込)



マイブック
2026年の記録ー^ー
大貫卓也 著(名譽教授)
新潮社
2025年9月29日刊
539円(税込)

